キャラクター名
黄 静霞 Hu□ng J□ngxi□

プレイヤー名

シンドローム	キュマイラ アザトース	ワークス	UGNエージェントA	カヴァー	ストライクハウンド隊員
オプショナル		年齢	24	性別	女
覚醒	探求	衝動	吸血	初期侵食率	31 %
出自	文化的な家系	経験	地下の恐怖	邂逅	紅き手

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	4	1	0	2		7
感覚	0	0	0	1		1
精神	3	0	0			3
社会	1	0	0			1

HP	37
行動値	5
(非装備時)	5
戦闘移動	10
全力移動	20

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	5		射撃			ＲＣ	1		交渉		
回避	2		知覚			意志	3		調達	1	
運転：			芸術：			知識：クトゥルフ神話	7		情報：UGN	1	
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
80%↑100%↓	白兵	26r+5		11+5D		
100%↑	白兵	30r+5		13+6D		
120%↑	白兵	30r+5		25+6D		

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

合計装甲：	0	合計回避：	0

所持品

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
変異種;アザトース	P	N		
ハスター	P 執着	N 憎悪		
父	P 懐旧	N 憐憫		
紅き手	P 執着	N 不快感		
スクートゥム；緒方紫	P 有為	N 不信感		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 4	残り財産P：

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果： 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果： コスト分のHPで復活								
コンセントレイト アザトース	2	2	メジャー					
効果： C値-[Lv]								
黄金の鎮魂歌	1	4	オート					
効果： ダメージダイスでクリティカルする								
完全獣化	3	4	マイナー					
効果： 肉体を使用した判定のダイス+[Lv+2]個								
神獣撃	3	2	メジャー				80%	
効果： <完全獣化>中、攻撃力+[Lv+2]D								
虚無の触腕	1	3	マイナー	至近	自身			
効果： 攻撃+[Lv+5]、射程10m								
蠢く触脚	5	2	メジャー	武器		<白兵>		
効果： 判定ダイス+[Lv]、攻撃+[Lv]								
超次元的存在	5	4	メジャー			シンドローム		
効果： 判定ダイス+[Lv*2]								
穢れたる接吻	2	4	メジャー				120%	
効果： 攻撃+Lv×3、装甲無視ガード不可、シーンLv回								
	★							
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

飛散した四肢らしきものから、鱗のように硬い皮膚と共に肉が、肉の破片が、肉の塊が、無邪気な子どものようにあちらこちらに転がり回っていた。
既に生物としての役目など疾うに終わっていることなど、終わっているはずであることなどは一目瞭然だった。
それでも蠢き続けるそれらは、生物を冒涜しているか、はたまた神を冒涜しているのか、はたまたこの場にたった一人佇む私を冒涜しているのか。
あまりにも変貌した風景は、私の暮らし住んだ家であり、そして劇作家たる父と、史学者である母に間違いはなかった。
12年前に中国の或る地方で起こった出来事である。

母と父を死にたらしめた物は何だったのか、あの日何が起こったのか。尤も、最初の手掛かりを探すことは容易だった。
それは両親の職業に鑑みれば当然で、きっと必然的に辿り着くものであったし、事実書斎を漁ってみれば見慣れない単語が繰り返し登場していた。

戯曲、黄衣の王。

ただ、それだけだ。
それ以上は何も見つからなかった。
幾年経っても、名前と、それが戯曲であるということ以外の情報は皆無であり、空虚な時間だけが過ぎていくのみであった。

そんな折、華南の方を旅しているときに怪物に襲われたことがあった。古来の山海経にも劣らぬ化物に囲まれたとき、ふと己の内に、自分とは異なる起源が潜んでいることに気がついた。
それは獣のように鋭く獰猛でありつつも、爛れ朽ちては不可視に輝いていて、決して獣のような下等な存在とは相容れない、もう一つの宇宙を体現していた。
私は直感するまでもなく直感し、理解するまでもなく理解した。

これこそが、私に災を齎したものと同一のものそれ自体であると。
随分とおかしな話であった。